

「International Plant Nutrition Colloquium」に参加して。

東京大学農学部 西澤直子

" XII International Plant Nutrition Colloquium " は 1993 年 9 月 21 日から 9 月 26 日まで西オーストラリアのパースで、 Prof. Jack Loneragan を Chairman として開催された。これに先立ち東海岸のブリスベンで " Third International Symposium on Plant-Soil Interactions at Low pH " が開かれ、 " Plant Nutrition Colloquium " の後には、二日間のエキスカーションに引き続いで 9 月 27 日、 28 日の両日 " International Symposium on Zinc in Soils and Plants " が、同じくパースで開催された。参加しやすいように植物栄養関連の 3 つの学会が連続してオーストラリアで行われたわけである。 " Plant Nutrition Colloquium " には、約 40 カ国から参加者 363 人、そのうち開催国オーストラリアからは 165 人が参加し、日本からはアメリカの 28 人に次ぐ総勢 23 人が参加した。

取り上げられたシンポジウムの題目は以下の通りである。

- 1 養分の吸収、移行と分配。
- 2 膜機能と養分吸收。
- 3 根圏と植物栄養。
- 4 分子生物学。
- 5 ストレス下における植物の生存のストラテジー。
- 6 窒素栄養と分配。
- 7 窒素の有効性とイオウ利用。
- 8 マメ科植物の無機栄養と窒素固定。
- 9 リン栄養と肥培管理。
- 10 ミコリザとリン栄養。
- 11 カルシウム、マグネシウム、カリ栄養。
- 12 微量元素に対する植物の反応。
- 13 有害元素。
- 14 肥料と収量、品質、環境汚染。
- 15 栄養障害と診断。
- 16 植物におけるボロン。

内容は多岐にわたったが、 Field における Problem Solving を重視している学会の性格から、またリン欠乏・銅欠乏・亜鉛欠乏・マグネシウム欠乏・ボロン欠乏等など多くの養分欠乏地帯、塩集積土壌、乾燥地を抱える開催国オーストラリアの事情もあって、各種の植物における欠乏症、過剰症、その解決事例が多く報告されていた。また、本大会の論文集の副題 " From Genetic Engineering to Field Practice " にも現れているように、現在多くの分野で強力な武器となっている分子生物学の手法を、植物栄養学の分野に取り入れなければいけないとする気運から、とくに「分子生物学」というセクションが組まれていた。無機元素吸収の実体として初めての、カリウムトランスポーターの遺伝子の単離が報告され話題を呼んだ。この遺伝子の単離を皮切りに、根における養分吸収を担う実体として、今後さらに各種のトランスポーターの遺伝子が単離されることが期待される。

次回、第 13 回は、国際植物栄養科学会議として 1997 年 9 月の東京での開催を決定した。